

宿題は悪影響を及ぼす？

尾形正宏

2016/03/18

最近、＜小中連携＞などというのが盛んになってきて、いろんなことを小学校と中学校で統一しようという動きがあります。こんなことは、統一しても何にもならないんですが、中には、真剣に取り組もうとしている教員もいるのかな。私が見る限り、その担当になった人以外は、みんな、いいかげんかも…。

さて、そういう会では「宿題」の話も当然出ます。宿題については、最近、あまり考えていなかったのですが、ここところ、量が多い宿題や学校で統一した宿題があるのを目にして、またまた、宿題が気になっています。

だいたい、学校でさえもイヤになっている勉強を、なんで家でもやらなければならないのか。教科の学習を嫌いにして、子どもたちの学ぶ意欲が増すのか？ そもそも、教師が、子どもたちの家庭生活にまで踏み込んでいて、何をやりたいのか？ そんな基本的な論議は全くナシの、「どんな宿題をしますか」「忘れてきた子にはどうすればいいですか」ですからね。

「今は宿題はいやだろうけど、いつかは『やってよかった』と感謝する日が来るよ…」という、教師の勝手な幻想だけで、この宿題という文化を続けてきているような気がしてなりません。

先月か、先々月に、「以前、宿題について、レポートをまとめたことがある」と話したことがあります。こんかい、なぜか、その手書きのレポートが見つかったので、マス刷りして持ってきました。1994年にまとめたレポートみたいです。レポートと言っても、私の考えが書いてあるわけではなく、宿題に対する何人かの考え方(何冊かの本)を紹介する文章でした。

さて、そんな宿題について考えていたときに、タイムリーにも、次のような話が飛び込んできました。

子どもと宿題

仮説実験授業研究会の会員で、私の FB 友達でもあるあらいさんが FB 上でシェアしていた情報がとても興味深い内容だったので、紹介したいと思

います。

以下は、そのシェアされていた HP^{*1} から転載したものです。

口子どもに宿題をさせると悪影響しかないことが明らかに

学校が終わっても家に帰ってから済ませなければいけない宿題にうんざりした記憶は誰にもあるものです。家で宿題をすることは学校の授業の予習や復習になると信じられているため、親も「宿題は終わった？」と尋ねる"家庭内パトロール"を行うわけですが、実際のところ、小学生に宿題を課すことは成績向上になんの影響も与えていないという驚きの研究結果が発表されました。

デューク大学のハリス・クーパー氏は宿題に関する研究を行う第一人者です。クーパー氏によると、宿題によって得られる利益は年齢に依存しており、特に小学生の年齢の子どもが宿題をどれだけやっても成績が向上するという証拠は見つかっていません。中学生でも宿題が成績を向上させる「良い影響」を得ることはほとんどなく、高校生になってようやく宿題で学術的な利益を得られるようになります。ただし、1日2時間が限度で、それ以上宿題に時間をかけると利益は減少していくとのこと。

「宿題をすると頭が良くなる」という一握りの神話的研究を払拭するべく、クーパー氏は1989年と2006年のおよそ200の研究結果を分析しました。多数の研究結果を総合的に解析した結果、小学生レベルの子どもが行う宿題に学術的な利益は発見されず、そればかりか子どもに悪い影響をもたらしていることまで判明しています。幼稚園から小学校への入学は子どもにとって向学心を深める機会となりますが、宿題をさせることは学習に対する興味を失わせる影響があると、クーパー氏は説明しています。

*1 あるHP… <http://gigazine.net/news/20160309-homework-has-no-benefit/>

元の記事はこちら↓

http://www.salon.com/2016/03/05/homework_is_wrecking_our_kids_the_research_is_clear_lets_ban_elementary_homework/

これまでの「宿題支持説」では、宿題は学校学習を強化しつつ「責任能力」を養うひとつのツールであり、親との自宅教育につながる機会になると言われていました。これに対してクーパー氏は、子どもの責任能力は養う機会は、親に言いつけられる雑用やペットの世話など、日々たくさん存在するほか、学校学習は子どもにとって重要ですが、「良い睡眠」「家族との時間」「遊ぶ時間」もまた子どもにとって重要な要素であり、宿題でこれらの時間を削っても良い影響は得られない、としています。

なお、子どもと親と一緒に声に出して本を読んだり、子どもが読書を嫌がる場合は、親が子どもに本を朗読してあげたりすることも、宿題より良い影響が得られることもわかっており、子どもに「楽しい」と感じさせることが重要だそうです。クーパー氏は「小学校の宿題は禁止するに値する」と断言しており、宿題のない文化の中で、子どもたちが放課後を有意義に過ごして日々楽しく学習できる生活を送ることを推奨しています。

もし「宿題のない文化」が浸透すれば、子どもは毎日嫌々宿題をする必要がなくなり、親は「宿題は終わった？」と目を光らせる気苦労もなくなります。教師も宿題を作成するために時間を割かなくてもよくなるため、万人にとっていいことづくめなのかもしれません。

■研究結果は、現場に影響を与えるか？

さて、みなさん、この研究結果と意見について、どう思われますか？ これくらいの記事だけでは、クーパー氏がどんな風に研究したのか分からないし、集めた 200 の研究結果から、本当に、「宿題は悪」という結論が導かれるかどうかは分かんないので、ここでは、これ以上のことは言えません。

が、しかし、私は、こう思うのです。

もし、この結果が、科学的な学術調査として「真」であったとしても、宿題や放課後学習に対しての学校現場や大人の判断は、そんなに変わらないだろう…だから、行動も変化しないだろう…と。

なぜなら、宿題が必要だというのは、教師の「なんとなくその方がいい」という思いから出発しているし、なにより、殆どの教師や学校が宿題を出してきて

いるからです。まわりが宿題を出すから出す、私も小さい頃宿題をしてきたから、今の子どもにもさせる…、そんな感覚が支配していると、その集団の中で、「それでも…」と単独行動をとるのは、たいへん難しいことではないかと思うのです。

一方で、「宿題は必要である」「宿題を習慣づけることで子どもたちは進んで勉強するようになる」という強い信念で長年教師をやってきた人たちは、いまさら、それを否定するような言説を目にしても、そう易々と自分のこれまでの考え(予想)を変えることはできないでしょう。「自分のやってきたことがムダだったかもしれない。いや、マイナスだったかも知れない」ということほど、ショックなことはありません。そんな思いをするくらいなら、こういう研究結果には知らんぷりを決め込む方が、ゆったり生きられます。

進化論とキリスト教

わたしは、このハリス・クーパー氏の研究結果を読んだとき、そして、その後の教師たちの反応を想像したときに、「進化論とキリスト教」の話を思い出してしまいました。

「この世の森羅万象は神が作りたもうた…」と教えられ、自分の生き方の基礎・基本としていたキリスト教の世界に、科学の世界から<進化論>というものが入り込んできたときに、熱心な信者たちはどうしたのか…。

歴史は、今までのキリスト教的な教えを否定する進化論が、幅広く広まるようなことにはならなかったことを証明してくれます。それどころか、キリスト教信者たちは、進化論そのものを否定したり、学校では進化論を教えないで…という運動をしたりしたのです。

今、キリスト教徒進化論が、どんな風になっているのか、気になったので、ちょっと調べてみました。参考までに…。

□エホバの聖人のコラム(<http://biblia.holy.jp/column008.html>)

宗教には「宗教と科学」という永遠のテーマがあります。その主要な論点と言えるのが進化論です。

キリスト教は創造論を支持しています。この宇宙も、地球も、地球上の生き物も、神によって造られたと考えます。しかし、一方の科学者は進化論

を提唱するようになりました。しかも、進化論は徐々に強化され、今では証明されたものと考えられています。

キリスト教には天動説の教訓があります。科学の進歩により真理が明らかになったのに宗教がそれを否定し、科学者を迫害するということがありました。これがいかに愚かなことだったかはよく理解されるようになっていきます。教会が多くの間違いを理解するようになったのも、ひとえに科学の進歩のおかげです。

1996年には、カトリックのローマ法王が進化論を認める声明を出して世間を驚かせました。その後、多くのキリスト教会がその立場に倣っています。でも、少し注意が必要です。進化を認めていると公言する教会のほとんどは、「神は進化という手段を用いて創造の御業を行われた」と教会員を教える方針を立てたにすぎません。つまり、「進化論を認める」ことを表明している教会の中に、100パーセント進化論を認めているところはないということです。肝心なところは創造論でしっかりガードしています。その教会に通う人たちは、ほかの教会と同じように「神様のお創りになられました美しいものに感謝しましょう！」といった教えを受けています。

キリスト教が神の存在を否定することはあり得ません。創造論を否定することもありません。とはいえ、科学的に証明された事柄に逆らっても意味がありません。事実と反することを信じるのは愚かですし、恥です。そこで、「神は進化によって創造された」という解決策が出てくることになります。

これは究極の解決策です。ひとつに、今後、進化論が何を証明しようとも、そのつど教会は「神はその方法で私たちを創造されたのです」と言って済ませることができます。さらに、信徒たちに「神様が世界を造った」と教えつつ、世間に向かっては「わたしたちの教会は進化を支持しています」と言うことができます。

これとは全く異なる解決策を考えた人たちもいます。根本主義(ファンダメンタリズム)の人たちがそうです。彼らは、神はたった6日で世界を創造されたと信じています。誰かが、地球には人類以前の何十億年もの地層があることや、何百億光年も離れた星から光が届いていることを指摘すると、彼らはこう答えます。「それは、造られた時点ですでにそうなっていたのだ」。彼らに言わせれば、地球上に何十億年もの地層があるのは、実際に何十億年も地層が積もっていったからではなく、“何十億年分もの地層のある地球”を神が造ったからです。何百億光年も離れたところから星の光が届くの

は、宇宙に何百億年もの寿命があるからではなく、“数百億年の歴史つきの宇宙”を神が造ったからです。つまり、神は“途中から始まる世界”を造ったというわけです。

これも究極の解決策です。今後、進化論が何を発見しようとも、そのつど教会は「神はその状態で世界を創造されたのです！」と言って済ませることができます。もつとも、先の場合とは異なり、この理論で世間に媚びを売ることはいけません。実際、彼らは「私たちは進化論を支持しています」などとは言わず、あくまで創造論を支持していると公言します。

長い引用で申し訳ありません。これがキリスト教側から見たくキリスト教の真実らしいです。一方、この記事を書いている「エホバの聖人」は、進化論さえも認めていないようです。ダーヴィンがガラパゴスで見つけたフィンチが島によって形を変えているのは、犬やネコなどのペットが形を変えて売られているのと同じであり、そんなものは「進化」とは呼べない…と言う風なことを書いてありました。これもすごいね。進化と品種改良をまぜこぜにしています。

とにかく、真剣な信者は科学を受け入れられないし、それが自分の生き方の基本であった人であればあるほど、受け入れがたいのです。それはちょうど、宿題が絶対大事だと言ってきたベテランの教師ほど、先のような科学的調査は、なんの役にも立たないことに極めて類似しています。

自分の経験だけで語ることの怖さ

わたしは、「宿題が必要だ」といっている人に聞きたい。

あなたは、学校でたった一人の宿題支持者になつたとしても、担任の子どもたちに宿題をさせますか？ それくらい、自分がやっている行動に責任をとれますか？ 子どもたちの貴重な家庭の時間を、子どもたちの将来のためにも学校が支配した方がいい…と言い切れる自信があるのでしょうか？

もし「そんな強い気持ちがない」のなら、宿題に対して、もう少し柔軟な態度をとっていた方がいいでしょう。少なくとも、宿題をやってこない子に対して、放課後に残してやらせる…など、さらに子どもたちの生活を縛る行動に出るのは、今すぐやめた方がいいでしょう。宿題へのペナルティは、勉強嫌

いをあおり、学校の学習さえも嫌がる子にするだけです。

が、ここまで書いて、またまた考えました。

この記事を巡る 2 チャンネルの意見には、「宿題には、くちちゃんと期限を守って提出する」という習慣づけの意味がある。それは社会に出ても大切なことだ」というのもありました。なるほど、そういうことか。もしそうだとすれば、宿題は提出させないといけなくなる。やってくるようにすべきであるということになる。友達のを丸写ししてでもいいから期限を守る…これは社会に生きる処世術かもしれません。

2 チャンネルには、他の記事同様、この研究に対しても、支持する意見や反対意見、それに特に自分の体験談がいろいろ語られていておもしろかったです。そして、そこに展開する話は、私の予想通り、<この研究が科学的な処理を経た結論かどうか>ということに対する判断云々ではなく、「そうは言っても、私の場合はこうだった」式の話しか出てこない。ま、それが 2 チャンネルの 2 チャンネルたる所以なので、仕方ないだろうが…。

一億総教育評論家のことについては、先月『「学力」の経済学』という本を紹介する折に触れたことですが、結局、自分の体験談のみで話をしている間は、研究なんて進まないでしょう。「オレは鍛えられたからこそ今がある」と思っている人は「宿題のお陰だ」と思っているんですから、それを予想変更することはできないんです。自分がイヤだったから宿題は必要ないというのも、逆の意味で同様。そして、残念ながら、教育現場の教師だって、それと似たり寄ったりの信念？で、いろんなことを子どもたちに課しています。

サルマル・カーン著『世界はひとつの教室』

クーパーさんの話を追っている間に、サルマル・カーン著『世界はひとつの教室「学び×テクノロジー」が起こすイノベーション』という本を見つけました。この本の中に「宿題」と題する項目があって、そこにクーパーさんの研究についても少し触れられているようです。

それを読むと、「カナダのトロントでは、幼稚園児への宿題を全面禁止した」という話などもでてきて、ビックリします。

本書を読み終わった後、私は、次のようなことを「読書日記」に記しました。

これからの教育を語る上で、本書に取り上げられている考え方や実践は、なかなか刺激的だった。

というか、すでにこれらは＜提案＞ではなく、実際に実施に移されている(しかも世界でも、有効な手立てとして確立している)カーン・アカデミーの概要を解説した本である。

本書の内容と、現在の日本の公教育と比べていると、なんとも、情けなくなってきた。「そんなこと言われても、日本が変わるなんて、あり得ないなあ」なんて思って悲しくなる。が、だからこそ、余計に、＜情報化の進んだ時代を的確に捉えた考え方の元で行う教育方法＞を知ることが、とてもためになると思う。

「これまでの自分の実践は、いったい、本当に子どもたちのためになっているのか」と、何度も自問自答しながら、本書を読み進んだ。そして、残念ながら「もしかしたら、学校全体で子どもの可能性をつぶしているのではないか。創造性を摘み取っているのではないか…」という気さえてきて、背中を冷たいものが、何度も落ちるのだった。

今の教育が当たり前だと思っている方、今の学力向上が大切だと思っている方、宿題が大切だと思っている方…等々、これまでの教育が当たり前だと思っている方に読んでもらいたい。また、逆に、「オレの受けた教育はイヤだった。宿題も嫌いだったし、授業を受けるのもかたかった」という人たちにも読んでもらいたい。

せめて、子どもたちの創造力を奪わない教育をしていかなければ…と、思った次第である。

結局、今、私たちができることは、「こういう意見もあるから、注意して宿題と付き合おうね」という、至極当たり前の事だけかも知れません。

ああ無情!

